

窪田美穂子
Mihoko KUBOTA

3歳から4歳までの子どもの理由を表す¹接続助詞 「から」の習得

A comparative study between parents and three- to four-year-old children in terms of the use of the causal conjunctive “kara”

本稿は、著者の先行研究（窪田 2015, 2016）の再検証を目的として、3歳から4歳の子ども4名による理由・非理由を表す接続助詞「から」の使用の習得過程を分析し考察したものである。

分析結果のうち先行研究とほぼ同様な点は、

- ①主節と「から」従属節からなる複節構造は3歳初頭から発話数では理由を示す意味の方が示さないものより多い。
- ②構造では、従属節＋主節（従属節先行型）の方が主節＋従属節（従属節後行型）より多い。最初に来る従属節に「から」をつけることが次節へのつながりになる等位接続詞的な意味や機能を持つものと考えられる。逆に主節を前にして次節で「から」従属節を出すことは少なく、補足的な意味で従属節を加えることは少ない。
- ③一方、「から」単独節は3歳初頭から理由を示すよりも示さないもので言いざすことが多く、その大半は情報提示の強調や主張・これからする行為の宣言や決意など相手の注意をひく効果を意図している。よって3歳からすでに単独節での終助詞的な「から」は複節構造の接続詞「から」とは異なる意味として用いられていると思われる。
- ④理由を意味する発話に関して、物理的事象を指す外的要因のほうが願望や欲求を表す内的要因より多い。これは玩具や絵本といった物理的道具やそれらに関連する情報を豊富に含んだ会話状況の影響が大きいと考えられる。
- ⑤「だって～から」の使用がわずかである。「だって」使用総数の大半が「だって～（な）んだもん」であり、「から」よりも自己正当化や相手を納得させたいとする対人的意思が強調される。「なぜ」に対して自己主張をするための応答として定着していると考えられる。

分析結果で先行研究と異なっていた点は、

- ①複節構造での節間ポーズの回数と割合は3歳前期から個人差が明確に見られる。しかし、どの子どもにおいても節尾にポーズや下降イントネーションを置いて発話する傾向は、主節＋従属節だけでなく従属節＋主節にも多く見られる。日本語の習得（伊藤 1990, 2005, 2006）や英語の習得（Diessel 2004）においては新情報を後続する従属節で述べるときにポーズやイントネーションが主節とは独立するという報告とは異なる。つまり本研究では節順と情報の新旧（前発話との関連性）とポーズとの関連性は見られな

い。

- ②理由を示さない複節構造に関しては、1名だけ条件提示やお膳立ての使用が他の3名より多く、ごっこ遊びなど一人で複数の役割を演じながら相手に行為を促すように発話している。店員と客の対話など対人的な慣用的発話を聞くうちに依頼や命令などを丁寧に述べる言語運用が4名のうちで最も早く習得されていると思われる。
- ③「けど」の意味で「から」を誤用している発話が随所にある。また、因果関係を逆に捉えて結果を示す主節に「から」を付ける誤りもある。逆接「けど」を用いるべき場合に、二つの相反する命題のどちらを反予想の結果とするかは、認知的に3歳代でも難しく発話計画で即座に判断できないことをうかがわせる。

1. 序章

本論文は、日本語を母語として習得中の子どもが理由を表す接続助詞「から」の使用をどう発達させるかを、筆者自身の先行研究（窪田 2015, 2016）を検証しつつ再考察する。「から」は主に接続助詞・格助詞・準体助詞としてはたらく多意義・多機能な語であるが、本論文では上記の先行研究と同様に従属節の最後尾にあり主節と従属節を連結する接続助詞（以下、接続詞とする）としての「から」に着目し、子供の養育者（主に母親）との対話コーパスから、接続された発話の意味と対人的発話上の機能を子供がいかにして使えるようになるかを考察する。国語辞典上の定義よりも実際の会話での「から」の意味と機能は状況や対人的意図への依存度が高い。文脈や主観性や対人関係などの対話を取り巻く要因から、「から」で接続された従属節と主節の関係性には理由（原因）と結果という因果関係ではなくくれない要因を含みがちである。さらに、「から」は接続する主節を伴わずに従属節を単独で表すことを可能とし、この機能から終助詞と定義されることもある。² 本論文でも先行研究同様に、「から」で結んだ複合節構造だけでなく「から」従属節のみ発話される単節構造（「言いさし文」白川 2009）をいかに子どもが習得するかについても分析する。

2. 会話での「から」の使用

2.1. 理由・非理由を示す「から」と節順の可逆性

「から」従属節の会話での意味は三つに大別できる（前田 2009）。その意味とは必ずしも理由を表すとは限らず、従属節と主節との意味関係や話者の意図が節の生起順序にも影響を及ぼす。

第一の意味は、(1) (2) のように従属節の内容が主節の内容を引き起こす直接の理由や原因となる。これら二つの節で述べられる事象が理由または原因から結果を導く因果関係を築く。

- (1) 雨が降ったから、湿度が上昇した。
- (2) 湿度が上昇した、雨が降ったから。

第二に、話者がある判断や態度にいたる理由や根拠を従属節で述べる。主節中の推論や判断の根

拠 (3) (4) または話者の態度や命令された行為 (5) (6) を実現するための理由が従属節で表現される。

- (3) まだ10時だから、終電に間に合うだろう。
- (4) 終電に間に合うだろう、まだ10時だから。
- (5) 忙しいから、今日は帰ってください。
(前田 2009: 251)
- (6) 今日は帰ってください、忙しいから。

第三に、話者が実行したいあるいは話者が聴者に実行してほしいことを主節で述べる際、従属節でそれを容易に実現させるための条件を前提にする。(7) (8) は話者自身が示す希望を容易に実現するための条件、(9) (10) は「条件提示」（白川 2009: 40-45）として話者が従属節で交換条件を提示することにより聴者に主節で要求された行為を実行できるように仕向けている。

- (7) 銅メダルでいいから、オリンピックでメダルが取りたい。
(前田, op.cit., p.252)
- (8) オリンピックでメダルが取りたい、銅メダルでいいから。
- (9) お礼をしますから、司会をしていただけますか。
(窪田 2015: 27, 2016: 200)
- (10) 司会をしていただけますか、お礼をしますから。
(ibid.)

第一と第二の「から」従属節は、主節の言明への理由を聞く質問「なぜ…であるのか・と言うのか？」への答えになるが、第三の従属節が答えにならないのは、従属節が理由ではなく行為実現への条件づけを意味しているからである（前田 2009; 白川 2009）。³

基本的に、主節と従属節の順序が入れ替えられるのは、第一と第二の複合節が理由と結果を連結する因果関係を成立する場合と、第三の主節で表わされる行為の実現を容易にする条件を従属節で提示する場合は行為の実現が目的であり従属節で示す条件は補足的なために、節の順番は可逆的である。⁴ 従属節と主節のどちらが先でも因果関係あるいは条件提示が保たれるが、英語（Diessel 2005）と日本語（Mori 1999）とも (1) (3) (5) (7) (9) のように従属節－主節の順番の方が多く用いられているのは会話よりも学術書体であり、最初に従属節があると「文体や談話での首尾一貫性を促すために次節の解釈へ導く方向づけをするから」

(Diessel 2004: 173)である。これは理由節以外の副詞節例えば条件節や時間節でも、先行する従属節が後続する主節の解釈に必要な共有されるべき場やテーマの枠組み(理由、条件、時間など)を用意する(Diessel 2001, 2005; Ohori 1996)。「副詞節が後続するのは発話処理が要因であり、一方先行する場合は発話処理よりもむしろ意味や談話上の語用的要因による」(Diessel 2005: 449)。例えば、従属節が先に来た場合に「から」は理由や条件を示す命題が先に来ることを告げるシグナルとなると同時に、因果関係なら原因→結果、条件提示なら条件→要望という自然な生起順となるように話者は発話前に節順を計画する必要がある。Diessel (2005) はさらに、従属節→主節の順番ではbecauseのような節頭にくる接続詞と比べ「から」のように節尾につく接続詞の方が、前節尾と後節頭を結ぶ等位接続詞andと似た働きをするため発話処理負荷が小さいとみる。「ゆえに日本語のような言語で従属節が主節の前にくる傾向があるのは、談話語用と意味と発話処理との間に競合がないからである。こうした言語ではこれらの要因すべてが副詞節の先行を優先するために常に主節より前にくるのである」(Diessel 2005: 467)。

しかし、実際の日本語の口語では主節の後に従属節が来ることが頻繁にある。これは原因が先で結果が後という因果関係の首尾一貫性や行為を実施する条件を最初に提示することよりも、発話を開始した後で最初の節を主節つまり結果として捉え直して後から理由を補足するために従属節を追加するといった、いったん前発話を終えた後にすぐ次の発話を追加するという発話計画の変更がなされた結果である。そのため主節→従属節の順番は意味関係において節間の統合性が弱い(Diessel 2005, 2008) (Diessel & Hetterle 2011)。成人の会話資料(英語 Ford 1993; 日本語 Ford & Mori 1994)を分析したDiessel (2005) と Diessel and Hetterle (2011)によると、日本語では主節の後に来る副詞節は、理由を示す従属節のうち47%、時間や条件を示す従属節のうち9%であった。同じ資料でDiessel (2005) では、主節の後に来る「から」従属節のうち93%が主節とは別のイントネーション単位を構成する一方で、日本語の条件節と時間節のうち59%が主節と同じイントネーション単位をなしており、英語のbecauseでも似た傾向がある。この点から後続の理由を示す従属節は「関係づけられる主節とはごく緩やかに結びついている

別個の主張」(Diessel & Hetterle 2011: 21)を表示する。この会話資料では、従属節のうちでも条件節や時間節よりも理由節において主節を言った直後に関連する考えを付け加える傾向がより高いことがうかがえる。

一方、主節と従属節を倒置できない場合がある。それが第四の「から」の意味である「お膳立て」(白川 2009: 45-48)すなわち主節で示す行為が実行されるように従属節が前提情報を表す場合である。最初に前提情報を示さないと行為が実行されないため(11)のように従属節が主節に先行すべきであり(12)のように後続できない。

(11)そこにソースがあるから、自由にとって下さい。(Alfonso 1966: 545; 白川 2009: 39)

(12)*自由にとって下さい、そこにソースがあるから。(窪田 2015: 27, 2016: 200)

第五に「段取り」(白川 2009: 48-51)においても、従属節が最初の行為を示してから後続する主節の中で残りの行為を一定の順序で実行できるようにするために、(13)のように従属節は先行するが(14)のように主節は先行できない。

(13)鍋にカレー粉が入りますから、焦がさないようよく混ぜ、火を止め、冷まします。

(窪田 2015: 27, 2016: 200)

(14)*焦がさないようよく混ぜ、火を止め、冷まします、鍋にカレー粉が入りますから。

(ibid.)

逆に、主節→従属節の順序しか許さない場合もある。第一と第二のタイプで見た理由や判断の根拠を意味する場合に、対人的談話上で意味と発話意図を強めるために従属節を「だって～から」で囲む場合である。「だって」自体は英語のbecauseとbutを併せ持つ意味があり(Yamamoto, Matsui, & McCagg 2005)、主節で理由を述べたあとに「だって」を従属節の冒頭に述べると、話者は聴者が主節に対して疑念を抱いたり反論するだろうと予測し、従属節の内容や発話行為の理由を強調したり正当化して同意へ導こうとする態度が強く表れる(Diesel & Hetterle 2011; Ford & Mori 1994; Mori 1994, 1999; 白川 2009; Yamamoto 2003; Yamamoto, Matsui & McCagg 2005)。よって、(15)で話者は後続する従属節に「だって」を用いることによっ

て主節で示す判断の理由を強めて相手の同意を得ようとするが、(16)のように理由を正当化するための判断(主節)を言う前にそれを強く主張したい理由(従属節)を示すことはできない。

(15)旅行には行かない、だってお金がないから。

(16)*だってお金がないから、旅行には行かない。

(窪田 2015: 27, 2016: 200)

こうした会話での「から」従属節は、理由や原因を表さないつまり因果関係が成立しない場合も主節と結びつくことができるが、発話処理上では話者が主節を言った直後に関連情報を補足したり話者の態度を強調したい場合に、付け足しで「から」従属節を言うことがある。ただし、その主節-従属節の順番の可逆性は発話意味の関連性や話者の態度の表明の仕方にかかっている。

2.2. 「から」従属節のみの「いいさし文」

英語の従属節は大半が「従属した構造であり母構造なしでは不完全な形をなす」(Diessel 2004: 48)のとは対照的に(ただしWhy…? 疑問文への答え方 Because…は除く)、日本語の従属節は主節なしでも存在する。白川(2009)は、単独で現れる日本語従属節を「いいさし文」と定義し、話者が主節を言わずとも文脈や関連情報または話者と聴者の関係や心的態度(モダリティ)などから両者が従属節のみから主節を推測できるとみられる場合はいいさし文が用いられやすい、とみる。

「から」従属節のみのいいさし文は単文のようにそれ自体が完結した意味を持つ。2.1節で分類した意味の大半がいいさしになる。複節構造の第一・第二のタイプである理由や判断の根拠を表す「から」を用いた例として、(17)は質問に答える中で主節を言わないで(まだ11時だから「帰らない」)答えを導く理由や根拠を述べており、(18)では相手の発話を主節と捉えて理由として従属節を補足する。一方、理由を表さない例として、第三のタイプである相手に行為を実行させるための条件の提示(19)と、第四のタイプの相手に行為を可能にするための前提情報を提示するお膳立て(20)がある(白川 2009: 57-60)。他のお膳立ての例として、(21)は話者自身のする行為が「話し手が自分の意志を告知する」(朴2008: 264-267)マーカーとしての機能にもなっている。(22)の単なる知識や情報の提示は、文を言い終わるための終助

詞的な「から」であり話者が具体的に何を聴者に期待しているのか文脈から容易に判断できないが、「聞き手が何かをするために参考になる情報として提示していると解釈できる」(白川 ibid. p.60, 強調ママ)ため、話者が告げる情報を相手に出来れば活用してほしいと意図するお膳立て用法となる。⁵

(17) A: もう帰るの?

B: いや、まだ11時だから。

(18) A: 田中さん今日は欠席なのね。

B: 出張中ですから。

(19) A: 司会は自信がないよ。

B: お礼をしますから。

(窪田 2015: 28, 2016: 200)

(20) A: そこにワインがありますから。

B: じゃ、ちょっとだけいただきます。

(21) ちょっと、そこまで行ってくるから。

(22) 赤ランプは「使用中」ですから。

また、いいさし文には話者が態度や感想の明言を意図的に避ける効果もあり、「言明を遅らせたりためらいを見せたりして、話者の言明を評価し直す余裕を聴者に与える」(Mori 1994: 161)。例えば(23)では話者が質問への答え(結局自分一人でした)を言う代わりに答えを導く理由を示しただけではなく、なぜ答えでなく理由を言うのかや話者自身の発話内容に対するモダリティや背後にある感情(苛立ち、怒り、遠慮など)を聴者に察知させて(Ohori 1995)聴者の同調を引く効果をねらっており、「だって」を冒頭に述べると情意性を強める効果がある(大津 2013)。

(23) A: 結局、自分一人でしたの?

B: (だって)あの人、何にもやってくれないから。(窪田 2015: 28, 2016: 201)

このように、いいさし文の発話と状況を元にして話者と聴者がスキーマすなわち知識や経験をはたらかせることにより、言われない主節の意味や意図を聴者が推測して行為を実行する他に、話者の発話態度を聴者が理解したり共通の目的を達成しようとする効果がある(萩原 2008)。

3. 日本語理由節の習得の先行研究

3.1. 子どもの「から」従属節の習得研究

日本語での文と文を接続詞でつないだ接続構造は子どもが2歳後半から3歳になる頃には高い頻度で観察される(Clancy 1985; Ito 1988; 伊藤 1990, 2005, 2006; 大久保 1977, 1984)。英語(Clark 2009; Reich 1986)やドイツ語・イタリア語・トルコ語(Clancy et. al 1976)の研究によると、ほぼ以下の順序で接続詞使用が発達するとみられる。連結(例:そして)、理由(例:から)、時間(例:とき)、条件(例:もし)、逆説(例:でも)、前後関係(例:前に、てから)。理由を表す接続詞が連結以外の接続詞よりも早期に習得されるということは意味や語機能の理解も容易になされていることを示唆する。この習得順序は、一回の発話で一つの内容を述べる段階に始まり、やがて個々の発話内容を理由や時間や条件などの論理概念に関係づけて適切な接続詞を結びつける認知能力の発達を反映している。これには親などからの言語入力の高頻度も習得順序に大きく影響していることが想起できる。

伊藤(1990, 2006)は、日本語の接続詞の習得は以下の順序で進むと主張する。

1. 一度に発話するのは一文のみである。2歳頃から意味が関連した文を並列する。
2. 3歳頃から接続詞(例:それで、ほんで)を挿入して複数の文の意味に関連性を持たせる。まだ一度に一文のみ発話し、最初の文を終了してから次の文の前に接続詞を置いて発話する。複数の文構造を統合するという機能として接続詞はまだ用いられていない。
3. 「から」が単文の中で使われ始める。子どもは発話処理に限界があるのを埋め合わせるために既知の情報を言わずに省略するためとみられる。つまり、2歳前後の子どもはまだ従属節と主節を順序付けて発話できないため、親などの相手が先に言った発話を既知の共有された内容のある主節とみなして、従属節のみ言明するということである。
4. 2歳後半までには結果が先で理由が後の主節—従属節という順序で文と文をつなぎ始める。
5. 文と文を理由が先で結果が後の従属節—主節の順序にして発話する。

伊藤は上記の習得順序を英語・仏語・日本語の

例から唱え、「新しい情報である主節を発話してから補足説明的な従属節を置く方が認知、記憶的にやさしいから」(2006: 61)、主節—従属節の順番が逆よりも先に習得されると主張する。柴田(1990)の観察した女兒は理由を示す「～(だ)から」を2歳5ヶ月頃使い始め、慣熟句からの発展・親の発話の模倣・発話意味の重要性などにより従属節の先行と後行が混在した。柴田は「一般的に、2単語文、3単語文などの短い文では、従属節が先行する傾向にある」(1990: 85)が、3歳以降も主節—従属節の順番の方が多くこちらが自然の発想だろうとみている。英語でも成人の発話と同様に初期のbecause構造では従属節先行は稀であり(Diessel 2004; Painter 1999)、Diessel (2004)は主節が新情報を提示してから従属節で補足情報を付加するためと見る。さらに主節—従属節が従属節—主節より発生が早いと主張されるもう一つの理由に、言語運用は対人的使用よりも自己中心的使用が先行することが挙げられる。Diessel (2004)の報告では、英語習得中の子どもはbecause従属節を物質的・論理的原因よりも心理的原因・理由を述べるために用いて、主節の発話後に行為や状況を実現させるために正当化されるべき要望や拒否などを付加することが多い。Clarkもまた原因を心の状態に由来する「内的要因」(2009: 245)と物理的な「外的要因」(op.cit)に分け、2歳3ヶ月から6ヶ月頃は内的要因を示唆する理由づけ(例: 'cos I sad, 'cos I want to, 'cos he tired) (op.cit)の方が多いと報告している。

しかし、実際に子どもの発話データから統計的に検証した先行研究(窪田2015, 2016)では2歳前期から従属節—主節の方を非常に多く発話しており、理由などの意味や情報の新旧と節順との有意な関連性は見られなかった。英語のBecauseなど従属節の冒頭に接続詞が来る場合、発話前に二つの命題のどちらを原因あるいは結果を意味するかを決め、順序を発話前に計画せねばならない。しかし、2歳や3歳の子どもの発話計画では前節から次節への意味関係の方向付け(原因から結果への流れ)がまだうまくできないため、because従属節—主節の順番は遅く発達するとDiessel (2005)は主張する。一方、日本語の「から」は節尾にくるため命題順序の設定は発話前に必要なく、「従属節から+主節」を発話するにあたり、前節の発話中に「この内容は原因にして、次に結果をのべる」計画をたてながら「から」を挿入することが可能

であり、次節を話す前に「から」を加え「原因から結果へのつながり」を作る方が発話計画の途中変更が容易にできる。この点で2歳・3歳時で「から」は節間に来る「だから」「それで」と同じ等位接続詞のような機能で用いられていたと想定される。こうした日本語「から」は英語becauseなどの節頭にくる接続詞よりも発話プロセスがより簡素で容易であることが、従属節―主節の習得が早い主要因であると考えられる。また、英語の事例(Diessel, 2004; Clark, 2009)によると2歳時では外的要因よりも内的要因の理由づけが多いという報告に関しては、自分の感情や要求を述べる自己中心的な言語使用は日本語の習得初期においても顕著であると想定できるが、筆者の先行研究(窪田 2015, 2016)では子どもの「から」の理由づけは逆に内的要因は外的要因よりも少なかった。玩具や絵本など物質を利用する状況での会話だったことが外的要因に話題が傾いた原因であろうと想定されるが、理由づけの要因と従属節―主節の語順の偏向性との関係の有無は不明である。

また、英語で顕著である主節―従属節の語順について、Diesselは「子どものbecause節の75.1パーセントが終止符的ポーズ (full stop) で終わっており、イントネーション上は独立した節である」(2009: 160)と主張する。さらにDiesselは「独立した発話(主語)に連結する接続節(従属節)は新情報を表す傾向があるが、イントネーションが結合した接続節は語用論的前提となる、つまり既知の情報を出すことが多い」(2004: 166 括弧は筆者)と主張している。つまり主節を発話した後にポーズをおいて従属節を発することは、ポーズの最中に補足的な新情報を計画していることになる。筆者の先行研究では、節間のポーズ・イントネーションの頻度には節順ごとの優位な違いはなかった。これは伊藤(1990, 2005, 2006)の主張とは異なり、節順と情報の新旧との関連性は特に見当たらないという結果であった。

2章でみたいいさし文にある終助詞的な「から」の用法に関して、Clancy (1985)や大久保(1977)によると2歳前期から使われ始め、「から」は終助詞としても最も早期に観察されている。話者自身がこれから行うことや意志を表明する2章でみた(21)のような例が2歳早期から多く用いられている。伊藤は大人との対話において「かなり非難めいた感情性の高い内容」(2005: 23)もあるとする。例えば(24)では自己の行為を宣言する

のみならず、言明されていない結果的な意味や決断を包含すること(例:ここにいるから、ママのところへ帰らない)によって拒絶を強調している。

(24) 祖母: ママへ帰りなさい。

子: イヤ イヤ ココイルカラ。

(1;11)⁶ (伊藤 2005: 23, 2006: 58, 原文ママ)

筆者の先行研究では、「から」単独節は4歳時までずっと複合節より頻繁に発せられ、理由を説明する意味では複合節と同様に内的要因よりも事象の提示など外的要因の頻度が高かったが、対象児一人は理由を示す「から」単独節の方を理由を示さないものより多く発話し、もう一人は理由でない意味での使用の方が多かった。理由以外の意味としては、相手に注目してほしいためか自分が今からしようとする行為や意志の宣言などの対人的意味や、何の目的で述べたのか単なる情報提示なのか不明な発話が2歳半ばから見られたが、(24)のような非難や苛立ちなどの強い感情を込めた「から」は見当たらなかった。また、「から」の後に意志表示や確認を求める終助詞「な」「ね」を付与してしたい行為や主張を強めることもわずかにあった(例: からのな、からのね)。一方、条件提示やお膳立てといった話者のモダリティに関与する相互行為を求める発話は、単独節も複合節と同様に見られなかった。3歳では「心の理論」(Doherty 2009)の視点移動がまだ自己中心であり、自分だけでなく相手にも優位に行為を進めるように目論む駆け引きとしての言語使用は認知発達上もっと先のことであり、相互的発話行為を更に経てからと思われる。大久保(1997)によると「だって」の使用は2歳7ヶ月頃始まり、理由を聞く質問への答えとして「定番の発話行為」(Yamamoto et. al 2005: 93)となる。著者の先行研究では「だって」の使用は対象児の一人でごくわずかであった。Yamamoto, Matsui, and McCagg (2005)の実験で「なぜ・どうして」と質問された3～5歳の子供は「だって」を発することが多いが「から」と結びつけた発話がほとんど無いことから、自己が発した主節の理由を強調するための「だって～から」の括り付けが定着するのは5歳から6歳以降と考えられる。

3.2. 第二言語としての「から」習得の研究

母語習得とは大きく異なり、外国語習得には母

3歳から4歳までの子どもの理由を表す接続助詞「から」の習得

語や学習形態や年齢など多様な要因が混在するが、第二言語としての日本語の「から」習得は母語習得の再検討において貴重なヒントとなる。

フランス語を第一言語(母語)とする子どもの場合(橋本 2015)、4歳11ヶ月から一年間に日本語入力を基盤として「から」「だって」と誤用の「だってが」のスキーマを個々に形成し、母語の転用などによる誤用スキーマを正用に転換し、スキーマを連結させより複雑な「だって～」構文と「だって～から」構文を形成することで理由のみの単一発話から因果関係を示す複節構造の発話へと発達した。

一方、大学で日本語を学ぶ成人学習者が使う「から」は接続詞よりも終助詞としての使用が早く、言語レベルの向上や会話経験の蓄積によって言いさしの「から」が増えるとされる(木山 2005)。斎藤(2008)によると、英語・中国語・韓国語母語話者の「から」は因果関係から対人的発話行為へと意味の理解が上達し、最初に理由が習得されたのち判断の根拠の「から」が条件提示の「から」の習得を誘発し、条件提示の「から」の習得では条件節「なら」との混用がある。この過程を斎藤は、学習者は理由の「から」を前件→後件への流れ、つまり原因→結果として捉えたのに対して、判断の根拠と条件提示の「から」では前件と後件を独立した意味で捉えたものとみる。このように第二言語習得では教科書を中心とした学習を通して原因や理由が最も早く習得され、推論の根拠がそれに続き、条件提示が最後に習得されるという報告から、「から」の習得順序は母語習得中の子どもにも同じ順序で発達するものと想定できる。自己中心的思考から相手の視点に立って相手の気持ちを想像するようになるまでの思考の発達をみる「心の理論」(Doherty 2009)の観点からみても、理由・原因や判断の根拠といった発話の表面的な情報に表れる直接表示的な「から」よりも、話者の心的態度つまりモダリティが反映される前提条件やお膳立てなどの「から」は発話そのものには表れにくく、自己からの視点のみで発話する子どもにとっては、相手が発話してもその意図を理解しにくく、命令や依頼など自己の利益になるような行為を相手に求める場合でないと自分でも使用するようにはならないと推測される。

4. 疑問点と仮説

先行研究(窪田 2015, 2016)の子ども2名の2歳から4歳までに記録された「から」の使用の分析結果で特に顕著な点は、従属節―主節の節順が圧倒的に多かったこと、原因を表す「から」には外的原因が圧倒的に多かったこと、理由以外の「から」の意味で前提条件・お膳立てなどの相互的目的達成をめざす使用はほとんどなかった、があげられる。最後の点は「心の理論」などの認知発達から考えると、相手の視点に立って気持ちを考える能力が言語面で明確に反映されるようになるのは3歳後半から4歳以降とされる(Doherty 2009; Kubota 2000, 2003, 2006; Tomasello 2003)ことにも背景があると見える。また、3章の第二言語習得研究でも見たように、従属節―主節の順序に因果関係の原因→結果の流れを載せるよりも、理由以外の目的や条件をこの節順に合わせるほうが文法的にも発話計画においても4歳ではまだ難しいと考えられる。対象児のうち1名の観察記録が3歳8ヶ月で終了したため、より明確な分析結果を得るには4歳以降の複数の対象児の調査年齢の均一性があるデータが必要となる。

5. データ

分析した資料はオンラインで一般公開されている子ども発話コーパスCHILDESのサイト(<http://childes.psy.cmu.edu/>)(MacWhinney 2000; Oshima-Takane, MacWhinney, Shirai, Miyata, & Naka 1998)から選んだMiiPro Corpus(Miyata & Nishisawa 2009, 2010; Nishisawa & Miyata 2009, 2010)に収録された以下の4名の子どもと養育者との自然対話である(一部モノローグ的発話も含まれる)。先行研究(窪田 2015, 2016)の対象児とは異なる。Tomito以外は明確な音声ファイルと動画の一部が現存し視聴可能である。MiiPro Corpusの全ファイルの中からほぼ3歳時から5歳前までに収録された以下のファイルを選んだ。ファイル名は子どもの名前(仮名)を表す。

ArikaM(以下、Arikaと示す): 女兒、観察月齢3;00.02-5;01.09、54ファイル計90,224発話のうち子ども47,218発話、MiiPro Corpusでは

最大の資料で毎月2～3ファイルからなるが、他の子どものデータと量的に調整するため毎月1ファイルを選出、計26ファイル抜粋

Asato：男児、観察月齢3;00.01-5;00.27、18ファイル計27,551発話のうち子ども11,183発話

Nanami：女児、観察月齢2;11.28-5;00.17、22ファイル計37,763発話のうち子ども12,059発話

Tomito：男児、観察月齢2;11.27-5;01.23、19ファイル計33,896発話のうち子ども11,095発話

表 1 に 子 ども の MLU (Mean Length of Utterances：平均発話長：一発話中にある形態素数の平均)の各時期での平均値を示す。平均値は各時期で近接しており (N=4; SD=0.34 in Stage I, 0.33 in II, 0.32 in III, 0.32 in IV)、概観として言語発達の著しい個人差はない。

段階 月齢	I 3;0-3;5	II 3;6-3;11	III 4;0-4;5	IV 4;6-4;11
Arika	2.91	3.04	3.34	2.82
Asato	2.17	2.33	2.80	2.42
Nanami	2.54	2.72	2.84	3.07
Tomito	2.84	2.38	2.57	2.45

表1 各段階での子どものMLU (平均発話長)

分析対象にした「から」従属節と単独節は、CHILDES検索コマンドのタグ“ptl: conj|kara=causal”がついたものである。これは助詞 (ptl=particle)または接続詞 (conj=conjunction) の「から」(kara)は原因を表す (causal)ことを意味する。原因や理由を表さない「から」にもこのタグが付与されている。模倣や直前発話の完全な繰り返しは分析に含めない。節間のポーズの有無は、前節の末尾のイントネーションが強調された場合と、節間に一秒かそれ以上の沈黙がある場合に判断した。意味または音声が不明瞭な「から」事例は「不明」として分析に含めたが、単節か複節構造か判断できない発話は分析から除外した。

子どもの「から」使用の意味分類を以下のようにした。前章で言及したタイプで、理由を表す「から」には第一のタイプである行為や事象が原因や理由から結果を導くものと、第二のタイプである話者の判断や態度にいたるまでの推論の根拠とし、理由を表さない「から」には第三の条件提示・第四のお膳立て・第五の段取りといった「何かの行為実行のために参照すべき前提情報を提示する」

(白川 2009: 68)ものとした。更に以下の要素も加えて分析した。⁷

1. 構造：複合節の順序 (「従属節＋主節」「主節＋従属節」)・「から」従属節 (単独節)
2. 意味：理由 (「なぜ＋主節 (または前発話や状況)なのか?」の質問をしたり想定した場合に理由や原因を含む答えとなる内容・非理由 (上記の質問に対する答えにならない内容)
3. 発話行為：新旧情報 (前発話との関連性や補足説明)・心的態度・節間のポーズ (一秒かそれ以上あるもの、または強い下降イントネーションで前節が終わるもの)

なお、「から」に話し手の態度 (modality)を表す終助詞がつく場合 (例:～からさ、～からね)、「から」は副詞節を導くため本研究では分析に含める。なお、単独節で「から」に断定の助詞がついて終わる場合 (例:～からや、～からだ、～からです)も分析に含める。ただし、「から」従属節につづく否定連語「じゃない・ではない」 (例:～からじゃない? ～からではない)では「から」節は名詞節になるため、この用法は分析には含めない。

6. 結果と考察

4名の3歳時と4歳時の「から」使用を構造タイプ (従属節＋主節・主節＋従属節・従属節のみの単独節)と意味タイプ (理由を示す・示さない)ごとに分けた使用状況を表2で示す。月齢ごとの有意な差はなかった。3歳以前のデータが乏しいため、伊藤 (1990, 2005, 2006) がみたような3歳以前の発話で「から」使用の初出の検証はできなかった。しかし、表2では4名とも3歳初頭から発話数では複節構造では理由を示す意味の方が示さないものより多く、従属節＋主節 (従属節先行型)の方が主節＋従属節 (従属節後行型)より多く、単独節では逆に理由を示さない発話の方が示すものより多い、という先行研究 (窪田 2015, 2016) でみた別の2児とほぼ同様の結果となった。やはり従属節先行型の方が後行型より早く習得され、節頭に来るbecauseとは異なり、発話前に各節の意味と因果関係を計画していなくとも、発話中に前節を理由の意味にして次節との間に「から」を挿入することで発話計画の変更を容易にできたであろうと想定される。

表3は複節構造での節間ポーズの回数と割合を

示す。ただしTomitoは音声ファイルがないため「から」を/kara:/と末尾母音を伸ばしポーズ記号(.)を置いた箇所以外には節間ポーズがあると判断できる箇所は見当たらなかった。⁸ 他3名には3歳前期から個人差が明確に表れている。例えばポーズの割合で見ると、Arikaは従属節＋主節が約20%に対して主節＋従属節が約80%と多く、後者では理由を示す場合が示さない場合より顕著だった。Asatoはどちらの節順とも理由を示すものが40%近くを占めるが理由を示さない発話にポーズが全くない。Nanamiは、従属節＋主節で理由を示す発話にポーズを置いたものが3.2%と僅かだが示さないものが全くなく、逆に主節＋従属節では理由を示すものも示さないものもほぼ50%近くを占める。どの子どもも年齢に従った増減など有意な差は見られなかった。先行研究(窪田 2015, 2016)の結果と同様に、節尾にポーズや下降イントネーションを置いて発話する傾向は主節＋従属節だけではない。これは、2章で見た成人の会話では日本語の理由を示す従属節のうち47%が主節の後に来ること(Diessel 2005, 2008; Diessel & Hetterle 2011)や「から」従属節のうち93%が主節とは別のイントネーション単位を構成すること(Diessel 2005)、そして従属節後行型が先行型より先に習得されるという伊藤(1990, 2005, 2006)の主張とは異なる結果である。Diessel(2004)は、イントネーションが独立した(つまりポーズのある)場合は後続する従属節は新情報を、イントネーションが結合した従属節は語用論的前提になる既知の情報を出すことが多いと主張するが、Tomitoを除く3名には節順と情報の新旧とポーズとの関連性は見られなかった。

理由を意味する発話に関して、Diessel(2004)やClark(2009)が主張する2歳前半の子どもの言語使用は自己中心的であり願望や欲求を表す内的要因の方が物理的事象を指す外的要因よりも多く発せられるという報告については、先行研究(窪田 2015, 2016)では心的状態を意味する内的要因の例として1児が2;11に「恥ずかしいから」「やりたかったから」と言った程度であり、玩具や絵本を用いた物理的事象についての発話が多く、DiesselやClarkの裏付けにはならなかった。本研究の4児は3歳以上で上記の報告より年長であるが、自身や他人の心的状態を理由付けした発話は、「わんちゃんほしいだから」(Asato 3;2.21)・「これやなから(これいやだから)」(カッコ内説明も含

めArika 3;5.10)・「こっちのえほんやりたいから」(Tomito 3;5.29)などごくわずかであった。著者の先行研究と同様、養育者と直接話をするのではなく複数の玩具を扱いながら即興で物語を展開するうちに自己や登場人物の感情よりも動作や物理的状况に着目して話したことが、外的事象の理由付けを増やす結果となったとみられる。

理由を示さない複節構造に関しては、表2にあるように4名のうち条件提示やお膳立ての使用はArikaが最も多く、ごっこ遊びで大人の役割や一人で複数の役割を演じつつ、丁寧に依頼・命令しながら条件を提示する(例:「いま作りますからお待ちください」(3;10.3)(例:「あたしがやるから貸してごらん」(4;1.6)または相手が行動しやすいよう前提情報を出してお膳立てする(例:「せっかくだからかぶってっ!」(4;3.22)または順序良く作業が進むよう段取りする(例:「いらっしやいませっていうからあっこちんあっちから来て!」(4;6.27)という発話が多い。Arikaがこのような命令・依頼・提案という相互行為的発話に「から」を多様に用いた点から、慣用的発話(例:「～しますからお待ち下さい」)を聞くうちにモダリティを意識するようになる言語運用が他の子どもよりもはるかに進んでいることがうかがえる。著者の先行研究でこうした発話は少なかったが、表2でArikaやNanamiの条件提示・お膳立ての発話のうち節間ポーズがあるものが多いことも、発話中に相手に有利に行動させようとする条件などを思案中であることが多いためであろうと想定される。

「から」単独節は、4名とも3歳初頭から理由を示すよりも示さないもの(条件提示・お膳立て・段取り)で言いさすことが多く、その大半は情報提示の強調や主張・これからする行為の宣言や決意を意味する。伊藤(1990, 2006)の主張では子どもは発話処理に限界があるために相手が言った発話を主節にして従属節のみを言うというが、4名とも相手の発話の話題に連結した意味よりも、2章の例(21)(22)のお膳立てのような参考条件を示す、あるいは自己の意思や態度を今相手にアピールしたい意図で単独節を発することが多かった。表2では、「だって」の「から」との併用はNanamiを除き「なぜ」質問への答えとして主に単独節での使用があるが産出数はごくわずかである。分析したファイル内の「だって」のみの使用総数(Arika 91; Asato 33; Nanami 91; Tomito 116)から見ると「だって～から」の割合はさらに少なく、5歳に

対象児	構造	意味	月齢				総計
		理由を	3;0-3;5	3;6-3;11	4;0-4;5	4;6-4;11	
Arika	従属節＋主節	示す	24 P 6	36 P 7	37 P 13 WP 1	9 P 4	137
		示さない	0 3 OP 1 J 1	0 2 OP 1 JP 1	0 2 OP 3 J 14 JP 3	X 1 J 4 JP 1	37
		不明	3	7 P 2	5 P 2	2	21
	主節＋従属節	示す	P 1	2 P 7	1 P 5	P 1	17
		示さない	0	J 1 JP 2	0 2 J 2 JP 4	OP 1	12
		不明	0	1 P 2	P 1	0	4
	から単独節	示す	5	17 W 3 D 2 WD 1	17 W 1	10 W 1	57
		示さない	50 J 1	83	126 J 15 O 2	24 J 3	304
		不明	5	7	6	2	20
Arika 月齢別計			100	184	262	63	609
Asato	従属節＋主節	示す	4 P 6 WP 1	11 P 2	4 P 4	4 P 1	37
		示さない	J 1 O 1	O 1	0	0	3
		不明	0	0	0	0	0
	主節＋従属節	示す	1 P 1	2	1	2 P 3	10
		示さない	0	0	0	0	0
		不明	0	0	0	0	0
	から単独節	示す	5 W 2 WD 2	3 W 2 D 1 WD 2	4	4 W 2	27
		示さない	14 J 1	17	9	10	51
		不明	1	0	1	2	4
Asato 月齢別計			40	41	23	28	132
Nanami	従属節＋主節	示す	13 P 1	11	22 D 1 W 1	12 P 1	62
		示さない	0 2 J 1	0	J 1	0 1 J 3	8
		不明	4	0	0	1	5
	主節＋従属節	示す	3 P 2	2 P 2	2 P 3	5 P 4	23
		示さない	J 2 JP 1	JP 2	J 1 JP 1	J 1	8
		不明	1	0	0	1	2
	から単独節	示す	1 P 1	4	6 W 1	3 W 1	17
		示さない	9	3	11	22 J 2	47
		不明	1	1	1	1	4
Nanami 月齢別計			42	25	51	58	176
Tomito	従属節＋主節	示す	32 P 1	10 W 1	10	13	67
		示さない	J 1	O 1	0	0	2
		不明	5	1	4	1	11
	主節＋従属節	示す	4	12	3	0	19
		示さない	0	J 1	0	J 1	2
		不明	1	0	2	0	3
	から単独節	示す	2 D 2 W 9 WD 1	6	4 D 1 W 1	3 W 1 WD 1	31
		示さない	19	9	6	9	43
		不明	7	0	1	1	9
Tomito 月齢別計			84	41	32	30	186

表2 Arika, Asato, Nanami, Tomito の「から」使用の月齢比較

注：P：節間ポーズあり O：お膳立て（OP節間ポーズ） J：条件提示（JP節間ポーズ） X：段取り D：だって～から

対象児	構造	意味	月齢				総計
	()内はポーズ入り	理由を	3;0-3;5	3;6-3;11	4;0-4;5	4;6-4;11	タイプ別合計
Arika	従属節＋主節	示す	30 (6) 20%	43 (7) 16.3%	51 (14) 27.5%	13 (4) 30.8%	137 (31) 22.6%
		示さない	5 (1) 20%	4 (2) 50.0%	22 (6) 27.3%	6 (1) 16.7%	37 (10) 27.0%
	主節＋従属節	示す	1 (1) 100%	9 (7) 77.8%	6 (5) 83.3%	1 (1) 100%	17 (14) 82.4%
		示さない	0	3 (2) 66.7%	8 (4) 50.0%	1 (1) 100%	12 (7) 58.3%
		段階別合計	36 (8) 22.2%	59 (18) 30.5%	87 (29) 33.3%	21 (7) 33.3%	203 (62) 30.5%
Asato	従属節＋主節	示す	11 (7) 63.6%	13 (2) 15.4%	8 (4) 50.0%	5 (1) 20.0%	37 (14) 37.8%
		示さない	2 (0) 0%	1 (0) 0%	0	0	3 (0) 0%
	主節＋従属節	示す	2 (1) 50.0%	2 (0) 0%	1 (0) 0%	5 (3) 60.0%	10 (4) 40.0%
		示さない	0	0	0	0	0
		段階別合計	15 (8) 53.3%	16 (2) 12.5%	9 (4) 44.4%	10 (4) 40.0%	50 (18) 36.0%
Nanami	従属節＋主節	示す	14 (1) 7.1%	11 (0) 0%	24 (0) 0%	13 (1) 8.2%	62 (2) 3.2%
		示さない	3 (0) 0%	0	1 (0) 0%	4 (0) 0%	8 (0) 0%
	主節＋従属節	示す	5 (2) 40.0%	4 (2) 50.0%	5 (3) 60.0%	9 (4) 44.4%	23 (11) 47.8%
		示さない	3 (1) 33.3%	2 (2) 100%	2 (1) 50.5%	1 (0) 0%	8 (4) 50.0%
		段階別合計	25 (4) 16.0%	17 (4) 23.5%	32 (4) 12.5%	27 (5) 18.5%	101 (17) 16.8%
Tomito	従属節＋主節	示す	33 (1) 3%	11 (0) 0%	10 (0) 0%	13 (0) 0%	67 (1) 1.5%
		示さない	1 (0) 0%	1 (0) 0%	0	0	2 (0) 0%
	主節＋従属節	示す	4 (0) 0%	12 (0) 0%	3 (0) 0%	0	19 (0) 0%
		示さない	0	1 (0) 0%	0	1 (0) 0%	2 (0) 0%
		段階別合計	38 (1) 2.6%	25 (0) 0%	13 (0) 0%	14 (0) 0%	90 (1) 1.1%

表3 Arika, Asato, Nanami, Tomito の複節構造での節間ポーズの頻度と割合

なった時点でも「だって」の「から」との括りが定着していないことになる。先行研究（窪田 2015, 2016）では「だって」の発現自体がごくわずかであったが、対象時期がそれより長い5歳直前までの本研究でも理由付けの「から」との連動が少ないのはなぜなのか。一つ考えられることは、理由を答える時に子どもは「だって」の後に「から」よりも意思を強く表す終助詞「(な)んだもん」を使う傾向があることである（Yamamoto 2003; Yamamoto, Matsui & McCagg 2005）。例えば「だっていやだもん」の方が「だっていやだから」よりも自己正当化や拒絶などの主観的意味と同時に相手とのステータス（年齢差・立場）の違いを超えて相手を納得させたいとする対人的意思が強調される。上記の4名の「だって」使用総数の大半が「だって～(な)んだもん」であり、「なぜ」系質問に対して自己主張するための定式化した応答方法と考えられたと考えられる。単独節につく終助詞的「から」による言いさしが3歳初期から理由を表すよりも自分の意思宣言や行為の強調として多く発されて

いること、同じ単独節でも理由を示す「だって～から」の使用がごく少ないことは、終助詞的「から」の方が理由を表す接続助詞「から」より先に習得されることや、それぞれ別の意味や機能として理解されていることを想定させる。終助詞的「から」の方が接続助詞「から」よりも話者の主観で自己中心的視点のモダリティを強く表すため、言語使用を考えると自己の意思・行為の宣言や情報提示など自分の発話をアピールする機能が3歳ですでに頻繁なのは頷ける。

他の特徴として、「けど」の意味で「から」を誤用している発話が散見される（意味が不確定なため表2では「不明」に含まれる）。(25)がその一例である。

(25) 本物の電車おしょと（お外）のあしってる
（走っている）からうるしゃく（うるさく）ないの？

（Tomito 3;10.3; カッコ内補足説明含む）

養育者とのやり取りの中で「から」が「けど」の誤

用だとわかる例もある。(26)ではArikaが複数のビデオテープのうち録画の終わったものとまだ録画中のものとを比較し後者の方に言及している。自身の後続発話で接続詞「だから」を「けど」の意味で誤用していることから、「から」は「けど」の誤りとわかる。(27)ではうさぎの塗り絵をした直後の発話中で、節前の逆接を表す「でも」が母親の発話を受けて「上手だ」「でも」「(塗った部分が)飛び出してしまった」と結びついたものの、後続発話で「飛び出した」「けど」「(それで)いい」という二命題を逆接「けど」でなく「から」で接続している。

(26)子：こっちが終わったから、こっちはまだ終わって…

調査者：こっち終わったの？

母：うん。

子：うん、だからこっちは終わってない。
(Arika 3;05.21)

(27)母：わー、じゃうずだねー、うさちゃんねー。

子：でも、とびだしちゃったからいいや。

母：はみだしちゃったねー。

(Nanami 3;5.23)

また、(28) (29)にある因果関係を逆に捉えて結果を示す主節に「から」を付ける誤りもあった。従属節先行型 (28)と後行型 (29)どちらにも誤用があるが、双方とも養育者の発話内容を子どもが受け継ぎ、後続の関連発話を計画中または発話中にどちらの発話を理由にするかの確に判断しないまま「から」を挿入したとみられる。

(28)母：熱いのきちゃうの？

子：うん。

子：ね。

子：熱い(のが)でちゃ (う)からフタないです。(フタないから出ちゃう)

(Arika 3;2.1; カッコ内補足説明含む)

(29)母：まぶしくなってきたねえ。

子：あ、やだ。

子：ナッチャンパパまぶしいの、おうち帰ってるから？(眩しいから・ので帰ったか)

(Tomito 3;5.29; カッコ内補足説明含む)

3章1節で見たように、理由を意味する接続詞は逆接を意味するものより習得されるのが早い。逆接を示すには二つの命題の食い違いつまり理由→

結果という流れに反する結果を想定せねばならない。接続詞「けど」「のに」などは原因に反する結果を招く「逆原因文」(前田 2009: 30)を形成する。瞬時の発話計画で二つの相反する命題を並べどちらを反予想の結果とするかは、認知的に3歳代でも即座に判断できないことがあり、因果関係の否定よりも認知的に容易な肯定の「から」を誤用してしまうと想定される。

7. 結論と今後の課題

3章で見た第二言語としての日本語習得の事例や著者の先行研究(窪田 2015, 2016)と同様に、本研究での対象児の3歳から約2年間は、構造面では従属節+主節の順番が主節+従属節より多いことが分かった。節尾に着く「から」が「それで」のような等位接続詞的なつながりをし、英語のBecauseのような節頭にくる接続詞とは異なり、発話途中で二節の意味と因果関係を変更するなどの発話計画の柔軟性が従属節+主節の構造化の容易さをさらに裏付けることになった。意味面では、因果関係や話者の判断や根拠を示す「から」が早期から最も多く、理由を示さない「から」のうち条件提示を表す「から」が少し見られるが、お膳立てや段取りなど相手の立場を意識して行為の選択をゆだねたり順番通りことを進めさせる用法はごくわずかであった。逆に「から」単独節は理由ではなく自己の行為や意思を宣言したり特定の情報を強調する用法が大半であり、3歳代で子どもは複節構造にはない終助詞的な「から」を理由や条件提示とは異なる意味として用いていたと想定される。先行研究について本研究でも、従属節先行の構造の習得が後行より先んじて頻度が高いことが伊藤(1990, 2005, 2006)の主張する習得過程に対する数値上の証拠となった。

だが依然、結果分析後も大きな疑問が残っている。言語習得には会話を通しての言語入力が必要である。2章で見た成人の会話資料分析(Diessel and Hetterle 2011; Ford 1993; Ford & Mori 1994)による日本語の理由を意味する従属節のうち47%が主節の後に来るという報告から見ると、子どもは周囲の成人が話す従属節+主節と主節+従属節の節順を五分五分の割合で入力し言語知識として蓄積していると考えられる。先行研究(窪田 2016)では2名の子どもの養育者のうち1

名は子どもと同様に「から」従属節＋主節の方が逆の順序より多かったが、あと1名は「から」従属節＋主節は逆の順序とはほぼ同じ頻度であった。では、子どもはどのようにしていつ頃までに従属節後行型の節構造を先行型とほぼ同じ頻度に用いるようになるのだろうか。主節の後に従属節を補足する頻度が高まるのは、対人的発話行為の発達やポーズやターンの取り方や発話処理や認知発達とどんな関係があるのだろうか。5歳以降に言語体系(特に文法や語い)の知識が豊富になるにつれ、一回の発話に含まれる情報量も増加する。1回の発話では収まらず、主節の後に補足する情報が従属節の形で表わされる頻度も高まると予測できる。そうした発話処理・計画は、社会的言語活動が多様化する就学後にどういった変化が見られるのだろうか。今後の研究課題である。

本研究では発話計画や発話処理と提示する情報や節順との関係を見るためのイントネーションやポーズを分析したが、音声ファイルが子ども1名や他の子どものファイルの一部で欠けており、正確で公平な分析は出来なかった。伊藤(2006)やDiessel(2004)の主張する情報と節順とポーズとの関連性は見られなかった。この点もまた今後の研究で音声分析を重視することで確認すべきである。

注

- 1 筆者自身の先行研究(窪田 2015, 2016)のタイトルでも「から」を「理由を表す接続助詞」として表記しているが、本論文で扱うように実際の「から」の用法には結果を導く理由にならない意味が特に談話上の使用で多い。この点でタイトルとは矛盾するが、一般的に接続助詞として用いられる「から」の意味として最も連想されやすく、多くの国語辞典でも第一定義にあるのが「理由を表す」という意味から、本論文でも「理由を表す接続助詞」という表記をタイトルにとどめておく。
- 2 「から」の他にも理由や原因を意味する接続詞かつ終助詞に「ので」があるが、意味や統語上多くの共通点と相違点がある。例えば、統語上「から」「ので」それぞれに接続する述語や副詞句が異なり、意味や語用では「ので」は「から」よりも丁寧さを意識したより客観的な理由を言う際に使われがちである(前田 2009, 南 1974)。紙面の制限上、本論文ではそうした「から」と「ので」の共通点・相違点や習得での事象には言及しない。
- 3 前田(2009)は主節中のモダリティ(陳述・命令・禁止・提案など)に着目するだけではこの三つの「から」従属節タイプを区別するに十分でないと主張し、重要なのは従属節と主節との間の意味関係であると主張する。
- 4 英語では斎藤(2008)が指摘するようにbecauseは条件節を作る副詞節ifのような条件を提示する意味では用いられない。
- 5 さらに白川(2009)は、なぜそうなるのかという問題を前提にしていない「から」の例として、「自己納得的な『から』」(pp.110-114)と「聞き手の自己納得を誘発する『から』」(pp.115-119)を挙げている。

- 6 子どもの年齢の表記は、年；月または年；月.日で表す。親の発話が記録された時期も、親ではなく子どもの年齢の表記を用いる。
- 7 前田(2009：第一章)は、副詞節のうち原因・理由、逆原因、条件、逆条件を意味するものを論理文と定義し、その意味区分にはレアリティーという概念即ち「言語に表された事態と現実との事実関係」(ibid. p.240)が事実的か(原因や理由、逆原因)または仮想的か(条件、逆条件)が深く関与しており、「から」従属節のあとにくる主節のモダリティ(陳述・命令・禁止・意思など)だけでは「から」の機能は区別できず、節同士の意味関係が重要である、と主張する。前田は、「から」に代表される原因・理由文を以下の3つに分類し、事実的レアリティーつまり実現されているかあるいは事実として認識されるか(原因や理由)、または仮説的レアリティーつまり実現されていないかあるいは事実か否か未確認であるか(目的)が深く関与する、とみる。
 - 1. 事態・行為の原因や理由「どうして？」で質問可能 …主節のレアリティーが事実的
 - 2. 判断・態度の根拠「どうして？」で質問可能 …主節のレアリティーが仮説的
 - 3. 可能条件提示「どうして？」で質問不可能 …主節のレアリティーが仮説的2章で見た第一のタイプの因果関係を導く理由は1.の事態行為の原因や理由を示し、第二の判断や推測をする理由は2.の判断や態度の根拠を意味し、第三の条件提示と第四のお膳立てと第五の段取りは3.の可能条件提示にほぼ該当するとみられる。
- 8 Tomito以外の養育者は子どもの「から」が下降イントネーションの時にあいづちを入れることが多く、それが一秒ほどのポーズになった(ただしオーバーラップはポーズとして数えない)。接続助詞での下降イントネーションは一つの発話内容の終わりを知らせて次の話者がターンを取るきっかけとなるが(Tanaka 1999)、養育者はあいづちを打つだけで子どものターン維持を促していることが多かった。

参考文献

Alfonso, A. (1966). *Japanese language patterns*. Sophia University.
Clancy, P. (1985). The acquisition of Japanese. In D. Slobin (Ed.), *The crosslinguistic study of language acquisition, Vol., 1: the data* (pp.372-524). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
Clancy, P., Jacobsen, T., & Silva, M. (1976). The acquisition of conjunction: A crosslinguistic study. *Papers and Reports on Child Language Development*, 12, 71-80.
Clark, E. (2009). *Language acquisition: Second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
Doherty, M. J. (2009). *Theory of mind: How children understand others' thoughts and feelings*. Hove: Psychology Press.
Diessel, H. (2001). The ordering distribution of main and adverbial clauses: A typological study. *Language*, 77, 343–365.
Diessel, H. (2004). *The acquisition of complex sentences*. Cambridge: Cambridge University Press.
Diessel, H. (2005). Competing motivations for the ordering of main and adverbial clauses. *Linguistics*, 43, 449–470.
Diessel, H., & Hetterle, K. (2011). Causal clauses: A cross-linguistic investigation of their structure, meaning, and use. In P. Siemund (Ed.), *Linguistic Universals and Language Variation* (pp.21-52). Berlin: Mouton de Gruyter.
Ford, C. E. (1993). *Grammar in Interaction: Adverbial clauses in American English conversations*. Cambridge: Cambridge University Press.
Ford, C. E., & Mori, J. (1994). Causal markers in Japanese and English conversations: A cross-linguistic study of interactional grammar, *Pragmatics*, 4, 31-61.

- 萩原千佳子 (2008). いいさし発話の解釈理論：会話目的達成スキーマによる展開. 横浜：春風社.
- 橋本ゆかり (2015). 用法基盤モデルから見た幼児の第二言語としての理由表現の習得のプロセス：インプットと母語に基づくスキーマの生成と相互作用. 認知言語学研究, 1, 113-137.
- Ito, K. (1988). On the acquisitional strategies of complex sentence formation: Examples from Japanese and English speaking children. *Gogaku Kenkyu: Center for Language Studies*, 10, 121-135. Kanagawa University.
- 伊藤克敏 (1990). こどものことば：習得と構造. 東京：勁草書房.
- 伊藤克敏 (2005). ことばの習得と喪失. 東京：勁草書房.
- 伊藤克敏 (2006). 接続文構造の習得方略. 小泉保博士傘寿記念論文集：言外と言内の交流分野, 東京：大学書林, 57-62.
- 木山三佳 (2004). 学習者言語にみる接続助詞「から」の談話機能の発達. 世界の日本語教育, 14, 93-108.
- Kubota, M. (2000). Development of a Japanese two-year-old's turntaking in mother-child conversation. *Tsuda Inquiry*, 21, 3-19.
- Kubota, M. (2003). Development of a Japanese child's response patterns to her mother's clarification requests: Clarification with interpersonal intentions. *Tsuda Inquiry*, 24, 196-211.
- Kubota, M. (2006). A comparative study of parental and child contextual self-repairs upon non-specific clarification requests. *Tsuda Inquiry*, 27, 109-126.
- 窪田美穂子 (2015). 2～4 歳児による理由を表す接続助詞「から」の習得. 「東京造形大学研究報」, 16, 23-34.
- 窪田美穂子 (2016). 理由を表す接続助詞「から」の親の使用と 2～4 歳児との比較. 「東京造形大学研究報」, 17, 195-208.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES Project: Tools for analyzing talk: Third edition, Volume 2: The Database*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- 前田直子 (2009). 日本語の複文：条件文と原因・理由文の記述的研究. 東京：くろしお出版.
- 南不二男 (1974). 「現代日本語の構造」. 東京：大修館書店.
- Miyata, S., & Nisisawa, H. (2009). *Japanese-MiiPro-Asato Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. Retrieved July 27, 2013, from <http://childes.psy.cmu.edu/browser/index.php?url=EastAsian/Japanese/MiiPro/Asato/>
- Miyata, S., & Nisisawa, H. (2010). *Japanese-MiiPro-Tomito Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. Retrieved July 27, 2013, from <http://childes.psy.cmu.edu/browser/index.php?url=EastAsian/Japanese/MiiPro/Tomito/>
- Mori, J. (1994). Functions of the connective datte in Japanese conversation. In N. Akatsuka (Ed.) *Japanese/Korean Linguistics, Vol. 4*, 147-163. Stanford: CSLI Publications.
- Mori, J. (1999). *Negotiating agreement and disagreement in Japanese*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2009). *Japanese-MiiPro-Nanami Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. Retrieved July 27, 2013, from <http://childes.psy.cmu.edu/browser/index.php?url=EastAsian/Japanese/MiiPro/Nanami/>
- Nisisawa, H., & Miyata, S. (2010). *Japanese-MiiPro-ArikaM Corpus*. Pittsburgh, PA: TalkBank. Retrieved July 27, 2013, from <http://childes.psy.cmu.edu/browser/index.php?url=EastAsian/Japanese/MiiPro/ArikaM/>
- Otori, T. (1996). Remarks on suspended clauses: a contribution to Japanese phraseology. In M. Shibatani & S. A. Thompson (Eds.), *Essays on semantics and pragmatics* (pp.201-218). Amsterdam: John Benjamins.
- 大久保愛 (1977). 幼児のことばとおとな. 東京：三省堂.
- 大久保愛 (1984). 幼児言語の研究：構文と語彙. 東京：あゆみ出版.
- 萩原千佳子 (2008). 「いいさし発話の解釈理論：「会話目的達成スキーマ」のよる展開」. 横浜：春風社
- Oshima-Takane, Y., MacWhinney, B., Sirai, H., Miyata, S., & Naka, N. (Eds.). (1998). *CHILDES for Japanese: Second edition*. The JCHAT Project Nagoya: Chukyo University.
- 大津隆弘 (2013). 「だって」の語用論. 「日本語学」, 32, 100-111.
- Painter, C. (1999). *Learning through language in early childhood*. London: Continuum.
- 朴仙花 (2008). 現代日本語における接続助詞で終わる言いさし表現について. 「名古屋大学言語と文化」, 9, 253-270.
- Reich, P. A. (1986). *Language development*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- 斉藤信浩 (2008). 因果関係を表さない接続助詞カラの習得：英語・中国語・韓国語母語話者のデータ比較を通して. 「名古屋大学言語文化研究会ことばの科学」, 21, 155-170.
- 柴田次呂 (1990). 赤ちゃんのことば：覚える・話す・考える. 東京：刀水書房
- 白川博之 (2009). 「言いさし文」の研究. 東京：くろしお出版.
- Tanaka, H. (1999). *Turn-taking in Japanese conversation: A study in grammar and interaction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Yamamoto, T. (2003). A relevance theoretic analysis of the Japanese connectives DAKARA and DATTE. *International Christian University Educational Studies*, 45, 187-198.
- Yamamoto, T., Matsui, T., & McCagg, P. (2005). Use of the connective *datte* and development of theory of mind. In M. Minami, H. Kobayashi, M. Nakayama, & H. Sirai (Eds.), *Studies in Language Sciences*, 4 (pp.83-98). Tokyo: Kuroshio.